

『戦後の歴史学と歴史意識』とその後の四半世紀

植山 淳

(一)

本巻は、戦後史学史に関する遠山茂樹氏の一九六八年六月刊行の代表的著作である『戦後の歴史学と歴史意識』と、史学史的考察を中心とする論評、書評等を収録したものである。本著作集を通して、現在でも古書店などでは比較的入手しやすい『戦後の歴史学と歴史意識』を一冊丸ごと本巻に所収し、約三分の二を占めさせた意味は、決して小さくはあるまい。同書が遠山氏の幅広い業績のなかでも、大きな位置を占める一冊であるということではないだろうか。本稿では、この『戦後の歴史学と歴史意識』を中心に考えていきたい。

序説において、遠山氏は戦前の歴史学は、科学としての性格が極めて希薄であり、歴史研究を史料および個別の史実についての考証の学局限し、天皇制のもとで、その学問性の一応の体裁を保ってきたこと、そして、天皇制が強制する歴史教育と終身の一体化に対する抵抗を示さないという弱点を持っていたとする。戦前の歴史学は、そういった学問の政治権力への暗黙の従属、それによって国家権力に付与された「学問の自由」、即ち国民の権利と切り離された特権的な権利を持つ研究者によって担われていたという。

そして戦後の歴史学が国家権力から自立し、科学であることが強調され、歴史観の科学性が論じられる様子が、遠山氏の「リアルタイム」な視角から描きだされていく。そこには歴史学研究会の大会テーマ「世界史の基本法則」、「国家権力の諸段階」、「歴史における民族の問題」や、そこでの議論等を通して、それぞれがその時代の緊迫した情勢を深刻に受けとめ、それに答えようとする研究者

の姿が見られる。戦後歴史教育の再開時の教育のあり方、時代区分論を契機とする議論、「レッドパージ」、講和条約調印とそれにつづく破壊活動防止法案問題、原水禁運動、六全協、スターリン批判といった時代状況のなかで、戦後のあるべき歴史学、歴史教育を追い求めている試行錯誤が本書であるといっても過言ではなからう。

そして遠山氏は、結論として、戦後、国民の言論・集会・結社の自由を背景に、問題意識と歴史観に裏打ちされた歴史学研究、歴史教育研究が社会的に承認され、また歴史学と歴史教育が不可分のものであることが理解されるようになったこと。それを前提として、政治・経済・文化が相互関連において把握されるようになり、世界史の理論と叙述が研究の対象にされてきたことが戦後歴史学の前進であったという。

本書に関する歴史的意味は、既に多くの書評も出され、また本巻には神田文人氏による的確な解説も付されている。本書の出版後、一〇年以上もたってから歴史学の道を志した筆者にとって、出版時点での本書の持った意味を紹介したり、本書での世界情勢の認識等について論評する力がないことはいまでもない。ただし本書が出版されて四半世紀。そろそろ現在の歴史学の状況のなかで、本書が意味するところのものゝ歴史の学び方、扱い方々を考えていこう、というのが筆者の意図である。

(二)

本書の刊行から二五年、この間の歴史学の展開について、先づろ網野善彦によって「日本列島とその周辺」(『岩波講座日本通史』

第一巻所収)がまとめられた。網野氏はここ数十年の史学史の中でひとつの中心であり、この文章は網野氏の立場からの史学史であるばかりでなく、遠山氏以後の史学史のひとつの大きな流れを示したものであるといっている。

筆者は『戦後の歴史学と歴史意識』以後、二五年の史学史の方向について、網野氏の論文「ただし同論文は『近代史学史』ではありえないが」を紹介しながら展望し、遠山氏の同書になかったもの、逆に遠山氏にあって網野氏の視点から欠落してしまったものをさぐってみたい。これによって現在の史学史状況のなかでの『戦後の歴史学と歴史意識』の意味を探ることができようし、我々がもう一度学ばなければならない点が見えてくるのではないかと思われるからである。

網野氏は同論文において、一九八〇年代に入る頃から、それまでの「日本文化論」に欠けていたアイヌ・沖縄に対する視点の必要性が提起され、さらには列島のアジアの人々との交流の視点、すなわち「すでに形を成したものと想定された中国民族、朝鮮民族、日本民族等々によって成り立つという前提で最初からとらえる見方」、すなわち「日本国家史、日本民族史」といった考えではなく、「日本列島上の人類社会史」の視点に立つことが強調されたとする。そして『日本の社会史』、『アジアのなかの日本史』、さらには『海と列島文化』といったシリーズ等の研究を通して「日本は海によって周囲の地域から隔てられた島国」といった、それまでの「常識」は崩れ去り、「国家的枠組みや時代的限定から自由な『民族』ハエトノスVの視点」、そして「国家の規制をこえ、国境をこえたハ地域Vの視点」から「柔軟な交通路」としての海、豊富な水産物を提供する宝庫としての海の機能が注目されるようになったとしている。そしてこのような研究を通して「前近代の日本の社会は基本的に水田を中心とする農業社会であった」とする「常識」も覆ろうとしているという。

実際、網野氏は約一三〇〇年間の列島の歴史のほとんどの時期は、およそ「河海の時代」であったという。縄文時代以来、河海を通じて特産物の交易は活発で、列島をこえる広域に及んでおり、水稲耕作をはじめ多彩な技術が海をこえて列島にもたらされた。また七世紀いったん形成された陸上交通体系も、八世紀以降荒廃し、一〇世紀には列島の交通体系は少なくとも物資の輸送については、完全に河海の交通を主軸とするようになった。それ以後、租税の納入は商業、金融、河海の水運のネットワークを前提としてはじめて成立し、多くの「百姓」たちは多様な非水田、非農業的生業に従事し、「農本主義」的な支配も一六世紀まではほとんど見られないという。室町幕府の酒屋・土倉への課税、中国大陸との貿易など、金融・商業に依存していたことは周知の事実である。

一七世紀、石高制を確立し、海禁政策を貫徹した「農本主義」を建前とする近世国家が確立するが、ここでも国家が「農民の全余剰労働を搾取し「自給自足の農村」を基盤としてきたという「通説」や、国家が社会のなかに広く生活している商工業者をすべて都市に集め、人民の武装解除を行なったという「通説」も、もはや荒唐無稽というほかない「権力中心史観」であるという。「百姓」は決して農民だけではなく、多くの非水田、非農業的生業を営む人々を含んでいたという。

そして近代日本は「琉球王国を併合、アイヌ民族の『日本人』化を通じて『日本国』の国境を確定するとともに、近世までの『日本国』意識を背景に、古代の『律令国家』のイデオロギーを『復活』させつつ近代的な国制を定め、「海を国境と見て、軍事的な必要から陸上交通を交通体系の基本とし、徴兵制、戸籍制度に基づく家族制度等を確立し」、「土地に対する課税―地租を梃子としつつ殖産興業」を推進し、同時に「農本主義」的イデオロギーを押し進めたとする。

こうして考えてみると、一三〇〇年間の間で、七世紀末の古代帝

国を志向した「律令国家」、その実体を備えたおよそ一〇〇年間、および一九世紀後半の内戦を通じて確立した「近代国家」の約七〇年間、計一七〇年間だけが、天皇を頂点に頂き、戸籍に基づいて成年男子を兵士とする軍制を実施し、海を国境として陸上交通に基本を置き、軍事的な「帝国」としての道を歩み、周辺の民族に対しては著しく侵略的・抑圧的であった異質な時代であったという。そして「農本主義」については、「近代国家」七〇年の間に国家的教育を通じて「日本国民」にたたき込まれたものであり、「日本民族の特質」や「日本人のエスニックアイデンティティ」とされてきた諸要素の大半は、この二つの国家の諸制度・イデオロギーと深くかかわっているという。

このように紹介してくると、どうしても網野氏の斬新な歴史観・歴史叙述に目を奪われてしまうが、この中には遠山氏の著書には見られなかった、あるいは遠山氏著作以後の歴史学の成果ともいうべき新たな視点、論点、さらにはこれからの歴史学の課題がいくつあるように思われる。

まずは「アイヌ・沖縄」の視点である。「民族」の問題は、まさに一九五〇年代の歴史学研究会での大きな課題であり、遠山氏自身戦後歴史学の成果のひとつとして、民族問題をとりあげたこと、しかも「民族を理解するためには、世界諸民族の歴史に普遍的な法則性とその民族の歴史の特殊具体性との有機的な統一の把握、古代以来の永い期間にわたって徐々に歴史的に形成されてきた民族の文化また民族の特色の認識、諸民族間の接触・対抗や文化圏・交通圏が一国史発展の内的条件にあたえる影響」といった問題をとりあげたことがあったとされ、そのなかから、日本民族と何か、アジア諸民族とは何かという問題意識が生まれたという。しかしそこから具体的なものとして、アイヌ・沖縄といった問題は提起されていなかったし、「日本」という枠を外した民族観、あるいは「列島上の民族」という捉え方は出されていなかった。近現代史からの、この問

題提起に対する一つの成果として、吉見義明氏の『草の根のファシズム』（一九八七年七月刊）があげられるかもしれない。

さらに網野氏は、ここからあらためて「日本」や「日本文化」、「天皇」といったものに対する曖昧なとらえ方を一擲する必要性があると指摘している。日本国が世界有数の経済大国に成り上がり、われわれ日本人が人類社会のなかでいかなる役割をはたすかが世界から問われている現在、一方で、急速な高度成長で自らを見失いがちな日本人には、「日本論」「日本文化論」が再び求められている。その中でどうしても浅薄な「日本論」「日本人論」が横行しているのが現状である。その意味からもこれは重要な指摘であろう。

もう一点は、「農本主義」ともいわれている農業生産重視の歴史の見直しという問題である。ただし近現代史研究においては、これに対して経済史、経営史などを含めて、工業生産、農林業、水産業、商業・貿易・流通等々、多岐に渉る研究があり、近年の研究の現状は、政治史と経済史の連携を中心に、この問題には対応がなされてきていると思われる。ただし網野氏の観点から、明治日本の「海上交通・河川交通から陸上交通への転機」について検討を進める必要があるかもしれない。また網野氏は、日本近代の七〇年間は、日本の一三〇〇年の歴史の中で特異なものであったという、その特異性はどこから生まれたのか。明治維新史のなかでの再検討が求められるよう。

(三)

しかし、一方で「日本近代史学史」という視点から考えて、遠山氏が課題として出されながら、網野氏の論文からは脱けた、否ここ二五年の歴史学の流れのなかでスポイルされてきた問題が三点ほどあるような気がする。

その第一は、なんとといっても「現在」というものに対するアプローチが先鋭化、矮小化し、いわゆる重箱の角をつつくような研究が横行する

なかで、あらためて先鋭化した自己の研究から「全体史」に何を還していくのか。さらには新たな「全体像」構築のために、なすべき方法とは何なのか。これについて遠山氏の研究姿勢は大いに学ぶべきであろう。もちろん『戦後の歴史学と歴史意識』に見られる状況に対するアプローチは、今考えれば性急に過ぎるきらいはあったであろう。しかし網野氏も十分には定置されなかった近現代社会の状況について、何のために研究しているのかという問題、歴史学の有効性の問題を問いなおす必要性を、本書はあらためて求めておられるように感じられる。

もう一点は、戦後歴史学の成果とは何だったのか、という問題について本書ほど明確に答えているものがないことである。本書においては、対立と討論を通して、学界全体の共有財産というべきものが蓄積されており、それが戦後の歴史学の成果であるとするのである。現在、戦後歴史学の見直し等々といった議論が盛んである。議論は大いに結構なことだと考えるが、遠山氏のいう戦後歴史学の成果は、だれもが納得できるものであるうし、これからのさらなる歴史学の発展を考える上で、戦後歴史学というものを、きっちり評価しておくことはひつようであろう。しかしこれもまた一点目の問題に行き当たる。歴史学がめざすべきものを明確にすることなくして、「成果」を見いだすことなどできるわけではないからである。

最後には教育と学問との関係である。氏はまさにこの戦後歴史学の成果を教育に反映させることが、本当の意味での教育と学問のありかたであるという。これは常識的に考えれば至極当たり前のことである。しかし本書がなって四半世紀、家永三郎氏をはじめ多くの方々の献身的な御苦労にもかかわらず、この当然としかいえない教育と学問とのあり方が、今だに実現できていない。しかしこの問題は「文部省の姿勢がまちがっているのだ」ということだけでは解決できないだろう。やはり本書に見られるように、学問の側が教育を真摯に考える、また教育の側が学問を真摯に考える必要があるのだから。

(四)

私ごとになるが、『戦後の歴史学と歴史意識』という本は、筆者にとっても思い出深い一冊である。筆者も一九八〇年代初頭（すなわち同書が刊行されて一〇年以上後というわけであるが）大学の学部時代、先輩に読まれたものである。

筆者の、学部一年、本書を最初によんだときの印象を記しておく。戦後の高度成長のなかで育ってきた筆者には、何故に遠山氏がこれほど真摯に歴史研究に取り組むのかわからなかったというのが本当のところであろう。唯一感じる事ができたのは、遠山氏の、広い意味での「政治史」→「全体史」にアプローチしていることとする姿勢に共感を感じたことである。神田文人氏は、本巻解説で遠山氏の戦時下の学習体験を紹介しておられ、さらに「著者は自らマルクス主義歴史家・唯物史観史学者をもって任じてはいたが、それだけを頑なに堅持する歴史家ではなく、政治史の叙述を最終目標とし、非マルクス歴史家・学者との交流をも望んでいた歴史家だった」といわれてるが、そのことを感じる事ができたのだろう。

それとともに、一方で当時、流行の兆しを見せていた「社会史」への疑問もあった。社会という広がりをもった対象を研究するのに、その「広がり」を踏まえることは必要であろう。ただその「広がり」は追及しても限らないものである上、一方で時代の連続性や差異を見えにくいものにしていくことも事実である。「社会」全体をとらえるという事は絶対できないだろうからだ。

社会の全体像を明らかにするという目的から、戦後の歴史学は、支配・被支配の関係、そして搾取・被搾取の関係を軸として捉えようとしてきた。その問題だけをあまりに性急に捉えようとしてきたがゆえに、それ以外の社会関係を捉えようというのが、結局は「社会史」の流行につながったように思われた。しかし「社会史」が、戦後歴史学の成果と別個に、新しい社会関係を描きだそうとすることは、歴史学全体の質の向上を意味しない。それはその新しい社会関係が、支配・被支配、搾取・被搾取関係とどのような関連性を持

っているのかを明らかにすることなくしては、少なくとも歴史学の発展とはいえないであろう。

歴史学の現状は、閉塞状態であるといえるだろう。これには二つの問題があるように思われる。そのひとつは、過去の研究成果が膨大なものになり、研究史全体が見えなくなってきたという問題である。しかしこの問題も、もうひとつの問題から起こってくるものだろう。もう一方の問題とは、歴史を分析するべき上で欠かすことのできない、現代社会をどう見るかという点が明らかでないという問題である。

歴史学の目的は、究極的には現代社会の持つ矛盾を描きだし、方向を指し示すことにある。しかし現代社会は、国際的に見れば戦後冷戦体制の大きな枠組みが解体し、それに変わる新しい社会システムの登場を前に、民族の問題、宗教の問題、言語の問題などが引金となり、全世界で地域紛争が勃発している。そしてそれにまさに添うようにして、国内では五五年体制の崩壊ともいわれる行財政システム全般にわたる大変革が進行しつつある。そのなかで、歴史家もまた現代社会が持つ矛盾への理解、新しい社会への方向性の理解なくして歴史を捉えていくことは不可能になっている。国際化が進み、多くの外国人労働者が日本に生活するようになり、日本人ビジネスマンが、東南アジアをはじめ世界中に出かけていく現代、支配・被支配関係、搾取・被搾取関係が、日本国内一国だけでは見えにくくなってきているという現状もあり、より複雑な社会関係へのアプローチをめざそうとする歴史学のあり方は、ある意味ではひとつの方向として当然のものなかもしれない。

(五)

以上、『遠山茂樹著作集』第八巻から、所収された『戦後の歴史学と歴史意識』を中心に、現在の歴史学の状況と課題を考えてきたつもりであった。しかし書くにつれて、本書に対する思い入れの深さゆえか当初の目的から離れ、自分の混迷がそのまま文章にな

ってしまったような気がする。不適切な分析、誤読なども少なくないと思われ、著者と読者には厳しい叱正を戴かなければならぬだろう。最後にもうひとつ、本書は筆者にとって、歴史学の方法、考え方を教えてくれた大学時代の多くの先輩達とともに忘れがたいものである。本書を再読して、あらためて近ごろお目にかかっていた先輩たちに会いたくなくなったことを記しておく。

(一九九四年二月三日記)

